

黄金の家

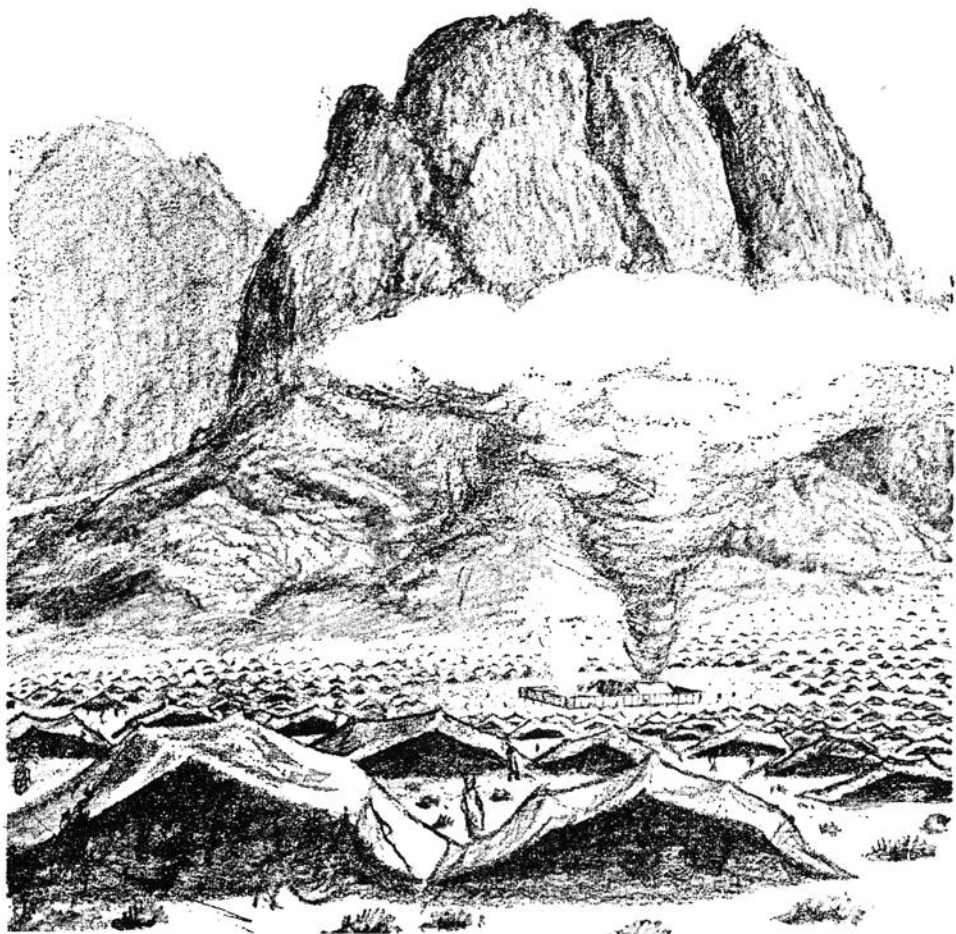
HOUSE  
OF  
GOLD

**WELCOME**

黄金の家

HOUSE  
OF  
GOLD

**WELCOME**



荒野の幕屋は宿営の中心になっています。  
背景はシナイ山。

# 黄金の家

そこはキャンプ場ではありませんでしたが、数千の天幕が張られていました。

そして、この天幕の真ん中に黄金（神）の家が立っていたのです。

天幕は、はでに彩られたものではなく、灰黒色をしており、砂漠の遊牧民がそこに住んでいました。

それも1部族だけではなく、12部族もある数百万人からなるイスラエルの民族、これがこの民でした。

彼らが旅をするときは、男、女、子供、それに家畜も加わり、非常に長い行列になりました。

天幕を張るときは、東西南北にそれぞれ3部族ずつ陣取るので、そこはいつも正方形の巨大な宿営場となりました。

そしてそのつど、彼らは中心に黄金の家を建てました。

それが**神の家**であったのです。

事実、これらの灰黒色の天幕とこの美しい家はあまり調和の取れるものではありませんでしたが、それはこの民と神との関係と同じでした。

そこに住む人々は何のようなものであったのでしょうか。

どの家族にも、それぞれの悲しみや苦しみ、また争いやもめごとがあったでしょう。

これらの天幕の中をのぞき、ひとりひとりの心の中を見ることができるとしたら、何が見えるのでしょうか。

たぶん、私たちの心の中にある自我、高慢、汚れた思い、敵意や憎悪と同じものでしょう。

## 地上の天国

この神の家である黄金の家は、なぜ、これらの人々の間に立っているのでしょうか。

なぜ神はこのような人間と関係を持ちたいのでしょうか。

なぜ人々を放っておかないのでしょうか。

なぜそのまま天にとどまっておられないのでしょうか。

神は降りてこられました。そして、地上にこの黄金の家をお建てになりました。

神は人々の真ん中にお住みになりたいのです。そして人々が神のそばで生活することを望んでおられるのです。

これはイスラエルの民の時だけではなく、現在も将来も、そして新しい天と地の時代になっても神の望んでおられることなのです。ヨハネの黙示録 21 章 3 節は、「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、……」と告げています。

神はあなたを歓迎しています。

神は愛です。

### すばらしい家

この黄金の家（神の家）は、神の御子のことを語っています。また、神と天のことについて語っています。

荒野における幕屋の話は、意味のない、ただの聖所に関する記述ではありません。聖書の中であれほど多くの章を費やして、寸法、重量や材料などを詳しく記録していることにはいったいどんな意味があるのでしょうか。

その計画の中にこの家は、神の御思いを反映しています。それは、天の栄光、天の都、新しいエルサレムについて語っているのです。事実、ヘブル人への手紙 9 章 23 節と 24 節は、幕屋の事柄は天にあるものにかたどったと述べています。

さて、天の中心は何でしょうか。

それは、神の御子であられる私たちの主イエス・キリストであり、この方にすべての富と栄光が宿っています。

彼は、永遠から永遠まで神の御思いの中心です。私たちはこれを聖書の中に見いだし

す。

ですから、幾度も幾度も、荒野にある神の家全体においても、またその部分部分においても、そこに主が啓示されているのがわかります。

聖書は神の本です。

神が人間に聖霊をお与えになり、書くべきことを教えられました。このようにして、神は聖書を私たちにお与えになったのです。

聖書の第2巻の出エジプト記に、幕屋のことが、無意味な設計図のようにではなく、創造者の御思いを啓示する生きた絵のように描かれています。

ひとつひとつの事柄には、その意味があります。これらの意味を私たちは、聖書の中から理解することができます。聖書自身がそれらを説明しているのです。

## 設 計

それゆえ、この家は人間の考えによって建てられるものではありませんでした。神が望まれるように建てられたのです。「また、彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」(出エジプト25・8 口語訳)。

モーセが40日間神とともにシナイ山にいたとき(出エジプト24・18)、神ご自身が彼に設計図をお見せになりました。

幕屋が造られている間、何度も何度も、「主がモーセに命じられたとおりに」とくり返されています(出エジプト39, 40章)。ですから、人間の思いを超えた建物であったに違いありません。

## 幕屋の概観

これをちょっとながめてみましょう。

遠くから見えるのは、丈夫な柱に掛けられている横100キュビト、縦50キュビトの麻布の囲いだけです（出エジプト27・9～12）。メートルに直すと、50メートルと25メートルぐらいでしょう。

囲いの中の家の屋根は、囲いより高く10キュビトあります。

屋根は色からいくと決して美しいとは言えず、ここからながめると、確かにあまり魅力はありません。

しかし、神の事に関してはいつもこうです。まだ神の家に入ったことのない人は、神に関することもみことばも理解できません。このような人にとって、これらの事は愚かです。これは聖書のコリント人への第1の手紙1章18節と23節にも書いてあるとおりです。また、神の御子、主イエス・キリストがこの地上におられたときも、人々は彼を特別な人物とは考えませんでした。彼らにはすべての事が隠されていたのです。彼らは、主イエスをつまらない人物とさえ考えました。「彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまされ、……私たちが彼を尊ばなかった」（イザヤ52・2, 3）。

すべての信者が経験によってこれを知っています。「最初、私を引きつけたものは何もありませんでしたが、主を知るようになってからは、主は私にとって、ますます偉大な尊いものとなりました」。

### 立入禁止

出エジプト記27・9～18

近づいてみるとこの囲いはたいへん印象的です。その白い布地は、天幕の灰色と対照的に、内部の清潔さを示しています。



白い亜麻布の幕が前庭を囲んでいました。前庭には全焼のいけにえの祭壇と洗盤と幕でおおわれている黄金の家がありました。ここに神は住まわれたのです。この回りで生活していた人々は私たちと同じように罪深い者たちでした。しかし神は愛です。神は人間とともに住むことを望まれました。

祭壇のそばを通過して、洗盤に沿って更に幕を通り抜け神の住んでおられる所に行くには、門（囲い前面の真ん中の部分）を通るひとつの道しかありませんでした。同じように今日も、罪人が神のところへ行くためにひとつの道があります。主イエスは言われました。「わたしが道です」。

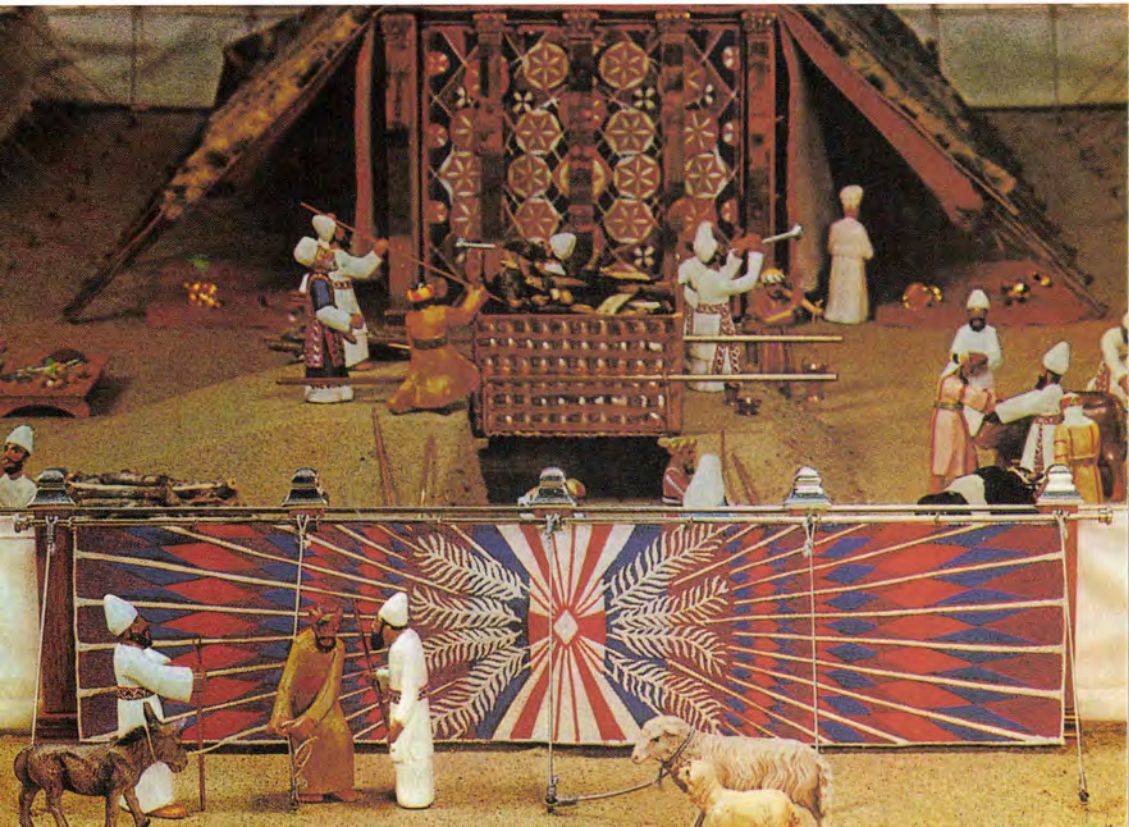


黄金の家は白い幕で囲まれていました。

神の清さと神聖さは、本当は罪を犯した人間をこの家から排除するはずでした。しかし広くて美しい門が作られました。「だれでもわたしを通過してはいるなら救われます」。

だれも外にいる必要はありません。

神はすべての人に、「どうぞ、お入り下さい」と呼びかけておられるのです。



高さが5キュビトもあるので、どんな人でも囲い越しに見ることはできません。

神はご自身を現わされません。

無条件の歓迎はありえないのです。これらの高い白布は、まるで、「立入禁止」と言っているようにも見えます。

これは重要なことです。ふつう神に近づくことは、すべての人に禁止されています。

これらの布地のように、白く汚れのない御方がひとりだけおられました。それはキリストです。彼は清く完全な人物でした。

あなたがこれらの布地をながめるとき、自分を清い者と感じるでしょうか。

多くの人々はキリストに従いたいと思っています。それはとてもすばらしいことのように見えるのです。

しかし神がまず私たちに、この家——いいえ、囲いだけでもう十分でしょう——を通してお教えになりたいことは、灰色の天幕に住んでおり、この汚れた世界に住んでいる私たち人間と神の清さには、はなはだしい差異があるということです。

そして、私たちが簡単に神に近づいたり、簡単にキリストのみそばに立ったり彼に従ったりすることはできないと教えています。主の清潔さ、罪のないことは、私たちの内側がどんなに汚れているかを示しています。

私たちはみな、汚れた罪人です。「義人はいない。ひとりもない。……彼らはその舌で欺く。……全世界が神のさばきに服する。……すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」(ローマ 3・10～23)。

人は、この真理を認めるところから始めなければなりません。

あなたは自分の罪を素直に認め、失われた者として、ありのままの姿で神の御前に出ることを望みますか。もしそうだとしたら、神はあなたのところへ行くことができます。

東側にひとつの門があります。これは罪人のために大きく開かれた門なのです。